

56. 被服工作の時間分析

単衣長着について

奈良女子大 ○水梨サワ子

奈良県芸大 中谷 和

1. Time Study の研究は家政学の分野でも広範囲に活用されて来ているが、被服構成面においてはまだ十分に適用されていないようである。それで私達は既報の紳士服に関する作業分析(奈女大家政研究 6, 1,)に引き続き同様の目的のもとに和服の作業分析を行ない、被服工作を数量的に把握することによって工作実習の合理化をはかり被服の指導と生産両面の能率向上に資したいと考えた。

2. 調査対象は形・地質をほぼ一定にした大裁女物単衣長着をとりあげ、被験者は奈女大被服科4回生20名とし所定の観測用具により1959～1960にわたって観測した。作業要素は調整・裁つ・標つけ・待針うち・素通し・縫う・しごき・きせかけ・紵ける・折る・その他の11項目である。

3. (1)作業時間要素別割合は「紵ける」「縫う」が総時間の70%以上を占め紳士服の場合の50%を上回っている。

(2)作業要素度数は200回内外で紳士服背広600～800回に比してはるかに少なく、作業要素内容は比較的単純であり、各要素時間については度数とともに大なもの、その逆なものがあった。